

筑波大学社会・国際学群国際総合学類

卒業論文

自己満足的ボランティア論の再評価についての考察

2021 年 1 月

氏 名：吉崎 あかり

学籍番号：201610418

指導教員：関根 久雄

目次

第1章 序論.....	1
1. 研究目的・研究背景.....	1
2. 研究方法と章構成.....	2
第2章 ボランティア活動をめぐる語り	4
1. ボランティア活動の定義.....	4
2. 贈与のパラドックス	5
3. ボランティア活動をめぐる語りの変化.....	7
(1)慈善事業の始まりからボランティア活動の始まり	7
(2)政治情勢にのみこまれるボランティア	9
(3)ボランティア論の自己効用論的展開	10
(4)ボランティア元年後の変化	11
(5)小括	12
第3章 ボランティア活動参加者の調査	13
1. 調査対象の詳細	13
2. インタビュー調査.....	13
(1) 活動の参加動機	14
(2) 活動を経て良かった点	17
(3) 活動を経て悪かった点	20
(4) その他.....	26
第4章 考察.....	31
1. 調査のまとめ	31
(1)理想と現実のギャップ	31
(2)自発性パラドックスの発生と解決方法.....	32
(3)ボランティアらしさとは.....	34
2. 調査から見る自己満足的ボランティア論	35

(1)自己満足的ボランティア論の再評価	35
(2)参加動機と自発性パラドックスの関係	37
第5章 結論	40
注	46
参考文献	47
Summary.....	48
謝辞	51

図目次

図 1	インタビュー対象者の参加動機	14
図 2	団体を辞めたいと思った経験の有無	22
図 3	返礼に着目した自己満足的ボランティア論	36
図 4	自発性パラドックスの解消方法	43

表目次

表 1	インタビュー対象者の概要	13
表 2	参加動機と自発性パラドックスの関係	38

第 1 章 序論

1. 研究目的・研究背景

1995 年、未曾有の大災害であった阪神・淡路大震災では、震災直後より全国各地から多くのボランティアが被災地へ駆けつけ、その数はのべ 100 万人を越えた⁽¹⁾。この年は後に「ボランティア元年」と呼ばれ、さらには 1998 年に NPO 法を生み出した[田中 2011:114]。これを皮切りに、ボランティア活動は日本社会に広く浸透し、災害だけではなく、環境保護や医療福祉、そして国内のみにとどまらず国際協力など、様々な場面で必要不可欠な存在となった。

例えば、2011 年 3 月に起きた東日本大震災においてもボランティアは大きな役割を果たしている。全国社会福祉協議会が行なった調査によると、岩手県、宮城県、福島県の三県において、地震発生時から 2018 年 1 月にかけて、延べ 150 万人のボランティアが駆けつけた。この震災において、文部科学省は「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について」⁽²⁾という题目的通知を全国の大学・短大・高専に対して提出し、学生の震災支援ボランティア活動の拡大を促した。これは、学生のボランティア活動が将来の社会の担い手となる学生の社会経験として意義があることをふまえ、各大学に学生がボランティア活動を行いやすいよう、ボランティア活動を単位として付与する等の配慮を行うことを依頼したものである。その他にも、大学におけるボランティアに関する授業や、日本財団学生ボランティアセンターなどの支援機関による経済面の支援や、市のボランティアセンターによる精神面の支援など、社会が若い世代にボランティア活動を促進し、提供している。実際、日本財団学生ボランティアセンターが全国の学生 1 万人を対象に実施した、ボランティアに関する意識調査（2017）では、自己実現・自分自身のためや、社会貢献のためにボランティア活動に参加する者が多いことがわかった⁽³⁾。教育的かつ社会的意義を含んだボランティア活動を経て、自分の経験や得た学びを今後の自身につなげていく者も多いだろう。まさに、政府の思惑通りとも言える。

その一方で、一般的なイメージとは異なり、実は「ボランティア」という言葉は、縮小の兆候が見られると仁平は述べている[仁平 2011:3]。実際に、全国社会福祉協議会において把握されているボランティアの総人数は、2011 年に 8,678,796 人と、2018 年までで最多人数を記録しているが、2000 年からそれほど数値の変化はなく、増加傾向にあるとは言え

ない⁽⁴⁾。仁平はこの縮小の兆候について、ボランティアの言説においては、繰り返し現れるパターン、つまり意味論形式があり、国家や資本の要請を説明する動員モデルのみならず、そのパターンを用いた分析を行うことによって説明可能であり、また、この2つを用いることによって、ボランティアをめぐる語りに、肯定と否定、称揚と冷笑といったパターンを生み出すという。つまり、ボランティアというものは、国家の政策や資本の動員によってのみ捉えられているわけではなく、偽善や自己満足といったボランティアに対する素朴な感情から成る意味論的な語にも影響を受けていると言える。しかし、一般的には否定的に捉えられがちな、上記の意識調査でもみられた進路や就職に有利であるという理由や、学校の単位として認められているという理由などで、自身の利益のために参加する者や、活動に参加したという自己満足で始めた者でも、予想しておらずとも最終的には、何か得るものが、あるいは良い影響があるのではなかろうか。つまり、たとえ自己満足という言葉がつきまとい、客観的には否定的に捉えられがちなボランティアであっても、参加者らが何かを得て返ってくるものがあるとすれば、自己満足的なボランティアというものを肯定的に捉えることができるのではないだろうか。

そこで本稿では、まず、本稿でのボランティア活動という用語の意味する範囲を定め、動員モデルと意味論形式という2つの枠組みを用いて、「ボランティアとは何か、どういう価値があるのか」ということについて、人々がどう考えどう捉えていたのか、そしてどう語っているのかを時代を追って述べていく。ボランティアやその価値そのものではなく、それらについての語りに注目する理由は、ボランティア活動という贈与行為において、与え手や受け手のどちらかの立場に偏らず、観察側にまわることによって、近現代のボランティア活動の捉え方がどう変化したのか、整理しやすいからである。そして、筆者の疑問を明らかにするため、実際にあるボランティア団体で調査を行い、参加動機や、活動を経て、その後自分自身にどう影響したのか、そしてどのような学びを得て、どのように経験を活かしているのか、与え手の立場から調査を行う。この調査を踏まえ、自己効用的、自己満足的ボランティア論を、与え手の変化に着目して再評価していく。

2. 研究方法と章構成

本稿は、ボランティア活動や、人々のボランティア活動に関する語りに関する文献、学術論文、統計資料、Web サイト等を基に、ボランティア活動をめぐる語りを論述する。また、筆者は、ある人材系の学生ボランティア団体に所属する7名に対してそれぞれ約1時間の

インタビューを実施した。インタビュー調査を通して、活動内容や参加動機、活動によって得たものや感じたこと等をヒアリングする中で、彼らが抱く理想のボランティア像を言語化し、贈与のパラドックスや自発性パラドックスを解消するような、自己満足的ボランティア論の再評価について考察する。

以下に、本稿の章構成を述べる。第2章では、本稿でのボランティア活動という用語の意味する範囲を、先行研究を用いて定める。また、ボランティア活動をめぐる語りを追っていく上で必要とする、贈与行為という表現や、それらの行為を説明する動員モデルと意味論形式という2つの枠組みについて述べ、本稿のボランティア活動というものの捉え方を定める。そして、「ボランティアとは何か、どういう価値があるのか」ということについて、人々がどう考えどう捉えていたのか、そしてどう語っているのかを時代を追って述べていく。第3章では、第2章で述べた語りの内の1つを取り上げ、実施したインタビュー調査の結果を述べる。続く第4章ではそのインタビュー調査のまとめと、調査から考察した自己満足的ボランティア論の再評価を述べ、最後に第5章では、すべての章をふまえて自己満足的ボランティア論をまとめ、結論とする。

第2章 ボランティア活動をめぐる語り

1. ボランティア活動の定義

文部科学省では、ボランティア活動という言葉は、「仕事、学業とは別に地域や社会のために時間や労力、知識、技能などを提供する活動」⁽⁵⁾と説明されており、厚生労働省では「一般的には『自発的な意志に基づき他人や社会に貢献する行為』を指してボランティア活動と言われており、活動の性格として、『自主性（主体性）』、『社会性（連帯性）』、『無償性（無給性）』等があげられる」⁽⁶⁾と説明されている。

また、東京ボランティアセンターは、「ボランティア活動とは、自発的に（自発性・主体性の原則）、他者や社会のために（社会性・連帯性の原則）、金銭的な利益を第一に求めない（無給性・無償性の原則）活動のこと」⁽⁷⁾と述べており、他のNPOや日本のボランティア団体も共に掲げるボランティア活動の4つの原則として以下の内容を述べている。

1. 自分から進んで行動する 「自主性・主体性」
2. とともに支え合い、学び合う 「社会性・連帯性」
3. 見返りを求めない 「無償性・無給性」
4. よりよい社会をつくる 「創造性・開拓性・先駆性」

これらを要約して柴田は、ボランティア活動とは、「自分から進んで」（自発性・主体性などの「動機」により）、「お金のためではなく相手や世の中のために」（無給性・無償性・非営利性、公益性・公共性・社会性・連帯性などの「目的」をもって）、「まだ国や地方自治体が取り組んでいないことに挑戦する」（先駆性・開拓性・創造性などの「役割」を果たす）行為と捉えた〔柴田 2011:2〕。

ただし、現在では実費や交通費などをもらう有償のボランティアの登場や学校での参加必須のボランティア活動など、上記の4つの原則に当てはまらないものが存在しており、統一された言葉の定義がないのが現状である。

次に、ボランティア活動という用語の意味そのものではなく、他の表現との比較によって意味する範囲を定める。比較する言葉は、よくボランティア活動という言葉と混同されやすい「奉仕活動」と「社会福祉活動」である。この3つの言葉を比較するにあたって、与

え手、受け手の間で行われている、外部から解釈される行為に着目して説明する。そうすると、奉仕活動は、有償か無償かに関係せず、与え手から受け手に奉仕と思われる行為を行うことであり、社会福祉活動は、奉仕活動の中で社会福祉の分野に特化したもの、ボランティア活動は、奉仕活動の中で、受け手から与え手の行為が無償であるものと、範囲分けすることができる。

以上を踏まえて、本稿ではボランティア、およびボランティア活動という用語を、「志願者、奉仕者、自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」であり、「自主性（主体性）、社会性（連帯性）、無償性（無給性）」などの性格を有し、与え手から受け手に対して、奉仕を一方的に行う活動をボランティア活動と定義する。

しかし、ボランティア活動という言葉自体の大まかな意味や言葉の範囲を定めたとしても、ボランティアは、言葉と実態で異なることが多く、これまでの日本における各論者も、それぞれの観点から対象の同定を行っているという〔仁平 2011:15〕。ボランティアをめぐる言説の大部分が、「ボランティアとは何か」という同定問題であることも、その表れであり、したがって、ボランティアという表現そのものの意味、そして言葉と実態の間を結ぶ、ボランティア活動を人々がどう捉えるかを表した言説、そしてボランティア活動の実態に分かれていると言える。本稿では、言説の部分を客観的に着目し、実態の評価に落とし込む。

そして、次節では先ほど用語の範囲を決める際に述べた、与え手と受け手の間で行われる、外部から解釈される行為の表象、つまり一般的に言われる「贈与」について詳しく述べ、言説を扱う視座の方向性を述べる。次に、3 節でボランティア活動を人々がどう捉えるかを表した言説について詳しく述べる。

2. 贈与のパラドックス

仁平は、ボランティア活動を含む参加型の市民社会の諸カテゴリーについて次のように述べる。

ボランティア活動とは、「善意」や、「他者のため」と解釈される契機を不可避免的に含んでおり、この「他者のため」と外部から解釈される行為の表象を「贈与」と呼び、この贈与こそがボランティア活動の言説を扱う際に最も重要な視座であると言える。なぜなら、贈与の定義を、当事者が実際にその意図を有しているかどうかとは独立し

ている点に成立するとすれば、社会的に贈与と解釈されるが、行為者がそうではない行為だと再規定する、もしくはそのような当事者の意図があってもなお観察者が、贈与ではなく当事者の利益によって行われたものだと喝破することも可能となり、様々な言説が存在することの説明が可能となるからである[仁平 2011:10-11]。

ボランティア活動の価値や有効性は、もちろん立場によって変わる。そこで、この行為を客観的に捉えたとすると、ボランティア活動は、相手がいて行うものであり、他者のためという意味を込めて贈与という行為とみなすことができる。上記の文章から分かるように、ボランティア活動を贈与とみなすことで、例え与え手が本当は他者の力になりたいというポジティブな動機で参加していたとしても、観察者はその行為は自己満足だとネガティブに捉えることも理論的に可能となるのだ。

ただ、ボランティアを、与え手から受け手による一方的に他者に与える行為だと捉えるのは安易すぎる。なぜなら、ボランティアにおいて、償金のみが受け手から与え手への返礼ではないからだ。そして仁平は、この受け手から与え手への返礼を「交換」[仁平 2011:12]と呼んでいる。

すなわち、贈与とは同時に遅れを含んだ返礼を伴う交換であり、例えば、与え手が自分の行為に満足を感じたり、受け手が感謝したりすることは返礼になりうる。交換と贈与は総合的に捉えられ、このように両者が総合的に捉えられる内では、贈与に対する物質的な返礼の不在であっても、交換でないとは言えない。また、受け手から与え手への返礼は、反対贈与とも言われ、反対贈与とは、善意を装い贈与するふりをして何かしらの負債を与えることを意味する[仁平 2011:12]。

このように、贈与という外部観察方法は、ボランティア活動を客観的に捉えることを可能にし、与え手と受け手のラリーを発見しやすくする。そして、返礼は常にポジティブなものとは限らず、時には受け手や与え手にマイナスなことも起きる。つまり、相手から何かを奪う形で反対贈与を獲得していると捉えられることもあるということだ。例えば、近代的な権力は善意を装って贈与をしていながら、実は相手や社会にマイナスな帰結を生み出していたと捉える考えも、可能となる。このように、贈与や交換にはパラドックスが存在し、仁平はこの意味論形式を「贈与のパラドックス」[仁平 2011:14]と呼んでいる。

そして、本稿では、ボランティア活動という言説に客観的に着目するため、この贈与のパラドックスを一つの基準として用いる。なぜなら、多数存在する、ボランティア活動を肯定的に捉える言説だけではなく、贈与のパラドックスのような否定的な捉え方を根底に置くことによって、このパラドックスを回避するためにどう意味論形式、または動員モデルと接続し、人々がどのように“ボランティア”というものを語ったのかをより客観的に捉えるためである。

3. ボランティア活動をめぐる語りの変化

本節では、前節で述べた「贈与のパラドックス」を用いながら、ボランティアを人々がどのように捉えてきたのか、その語りの変遷を明治後半期から現代までの時代を対象に述べていく。ボランティアとは何かという曖昧で恣意的な言説ではなく、ボランティアを人々がどう理解し捉えてきたかを追うことによって、客観的にボランティア活動を把握することを目的とする。ボランティア活動をめぐる語りに注目するにあたって、本稿では、仁平が取り上げている「動員モデル」と「意味論形式」という主に2つの枠組みを用いる。動員モデルとは、ボランティア活動をマクロな社会レベルから観察し、活動に参加する人々の善意や思いとは裏腹に、国家の政策や資本に動員されていると診断を下す枠組である。他方、意味論形式とは、ボランティアの言説において繰り返し現れる、素朴な感情に基づいた枠組みである。この異なる2つの枠組みを、語りを理解するために用いることによって、ボランティアを肯定、もしくは否定する言説を理解していく。

(1) 慈善事業の始まりからボランティア活動の始まり

まず、ボランティアという概念には、前節でも述べたように、他者のためという互助的精神に基づいているが、元の理想形は欧米諸国でのイギリスの郷紳に当たると中島は述べる。そのイギリスの郷紳たちは、市民革命を経て、国家に対する義務から解放され、その後郷里の地で無給の行政担当者として、郷里の治安維持や裁判業務等に関わったという[中島 2009:55]。その後、このボランティアという概念が日本に渡ったわけだが、その頃の贈与システムを仁平はこう述べる。

人々に同情を訴え、慈善事業の寄付を煽るようになったのは戦前の明治 30 年代である。贈与行為を提供する者は、民間の慈善事業家や社会事業家であった。国家の形

態としては、社会に対して国は統制を強いており、社会権保証において国家は責任を取らず、国民は不安に包まれている状態であった。その際に社会保障機能を担うことを期待されていたのが、民間慈善事業で、法的整備がなかった上に資金調達を事業団体自身でやらねばならず、これが自らの活動についての饒舌な語りが発展していく。方法としては、雑誌や宗教を媒体として人道に訴え、贈与行為を煽り、反対贈与を行っていた[仁平 2011:36-43]。

つまり、与え手は宗教的動機や政治的動機による贈与を行い、社会は贈与物を受け取るという、それぞれの価値体系が異なる交換が行われていたと言える。これはまさに、社会の外部から宗教という動機を供給できるので、贈与のパラドックスの解消には有効である。

その後、防貧法規の成立、社会事業財政の拡大など、慈善事業が社会事業として転換していく[仁平 2011:57]。そして、1920 年、『人道』という雑誌に、人々に社会のために行う「奉仕」という概念を載せた道徳論が掲載され[仁平 2011:59]、社会事業としての奉仕という言葉の広がり与人々の関心が伺える。ここでの「奉仕」というのは、①誰にでも適用可能で、②純粋贈与ではなく社会を介して交換を行い、③慈善より多くの行為に適用可能である[仁平 2011:59-62]と紹介されていた。すなわち、この時期から奉仕という言葉が高い凡庸性を獲得し、社会福祉という領域を超えて独立した言葉となったことが読み取れる。これに加えて、大正期には、方面委員制度という、社会の困窮者を各市町村の決められた担当者が「善良なる公民」として社会奉仕を行う制度ができた[仁平 2011:65; 中島 2009:68-69]。ここで大きな変化として、方面委員と対象者の相互関係が社交を源泉とする感情の上成り立っていたことが挙げられている。つまり、よりミクロな関係性を持つことで、身近な存在だからこそ成り立つ感情を生み出し、やっていて楽しいという、他者のためという動機以外の動機が、新たな贈与のパラドックスの解決策となったと言える。ただし、方面委員という制度が持たない自発性を、なぜ戦前のボランティアが含むようになるかという疑問に対して、セツルメントという、社会強化施設において無給で活動しているものの台頭によるものであると仁平は述べる。セツルメントは法律や援助技術など専門的な知識を持つ者が、地域住民に教育を行う場であるが、そこで、専門家ではないが、専門家と地域住民の間を取り持つ連絡者として社会事業に参加していた者を、論文中に日本で初めてボランティアとして扱ったことから、誕生した[仁平 2011:72,73]。このように動員モデルから捉えたボランティアは、ボランティアという概念そのものが日本に伝わった後、

慈善という比較的上位者から下位者への垂直的な贈与から、奉仕という社会を媒体として相互に交換する贈与に変わった。そして、次第にその中から自発性と無給である特徴を含んだボランティアが生まれたと言える。

(2)政治情勢にのみこまれるボランティア

戦後のボランティアの変化について、仁平はこう述べる。

戦中は、社会が天皇に奉公することで天皇から無限の恩恵を受けるとされた(実際は負債を受け取った)が、この反省を踏まえ戦後は、国家に対する社会の自律と国家による社会権の保障、すなわち民主化を目指していくこととなるが、社会の自律と社会権の保障は両立ができず、とくに、社会の自律によって民間施設に対する補助金が打ち切られ、社会事業施設が追い込まれてしまう。しかし、社会権の保障には、なくてはならない存在であるので、法を施行し、社旗福祉法人を創設する。これがのちにボランティア活動促進の主要アクターとなるのだが、不分明な領域が誕生してしまう。この問題に対して、人々は民主的な主体として、教育を通じて成長していくという意味論で解決していく[仁平 2011:93-102]。

この文脈から、戦後、日本は社会の民主化を進めるべく、国家に対する社会の自律と国家による社会権の保障を進めていくのだが、この2つは両立困難で、それゆえ生じた国家と社会の不分明な領域に社会福祉法人ができたということが読み取れる。この状況が、動員モデルのみならず意味論形式からボランティアを語る状態を生んだと言える。

その後、冷戦時の日本は、民主化を反転させようとする保守側とさらに民主化を進めた革新側に二分していったが、それによって贈与のパラドックスは政治により深く交錯していったと仁平は述べる。

自発性や贈与の領域は、政治的カテゴリーとして運用されていき、その中で、より人間的なものとして、社会福祉における贈与の位置付けをボランティア論で扱うようになった。1950年代は、まだボランティアという言葉はあまり使われていなかったが、アメリカのコミュニティ・オーガニゼーション論に基づいた、ボランティア自体が民主主義的实践であるという見方や、一般の人々をボランティアとして訓練し、専門性

を向上させることで、社会事業の民主化を行う、専門性を帯びたボランティアという見方が登場した[仁平 2011:108-121]。

つまり、社会保障拡充のための政治運動としてではなく、民主主義であるという形でボランティアは捉えられていたと考えられ、あまりにも政治と折り合いが悪いことが見受けられる。

1960年代は社会福祉協議会が台頭し、「社会福祉のボランティア育成と活動推進のために」という文書を出し、まだ浸透していなかったボランティアを、与え手のボランティア登録から、受ける側の体制の整備まで、広めていった[仁平 2011:158-160; 中島 2009:70]。しかし、急に拡大した参加機会は、この時期の自発性を、本人の意思を超えて、社会との関係の中で措定されるものにさせることが多くあったと仁平は述べる。これが、後の自己効用論のような否定的な考えにつながったと考えられる。

(3) ボランティア論の自己効用論的展開

1970年代、高度経済成長によって、国家が直接ボランティアの推進政策を進めていくようになったと仁平は述べる。

まず、文部省が、急激な社会構造の変化に対処するための社会教育として、ボランティア活動を推進した。成人の社会教育への関わりと、高齢者の生きがいを見出すための活動参加を推進するものであった。「生きがいづくり」という文脈は、内容への関心よりも、主体となる担い手の効用が重視されていることを示していた。また、厚生省のボランティア政策や、コミュニティを重視する考えの浸透によって、外挿の目標ではなく、担い手の効用重視のボランティアが広まっていった。他者への贈与行為が集積することによって、社会を良くし、結果として自分の利益になるという贈与から、利己の集積こそが社会や他者の利益となるという、社会連帯思想から成る自己効用的ボランティア論に変化していった[仁平 2011:274-284]。

つまり、1970年代は国家によるボランティア政策の推進と意味論レベルにおける自己効用的ボランティア論への転回が起こったのである。その上、これはあらかじめ贈与のパラドックスに対する解決を内蔵させて普及しているため、パラドックスの新たな解消論である

ことを意味している。

その後、教育政策としてもボランティア活動が取り上げられるようになり、1980年代、ボランティアという言葉が新聞で見ない日は無いほど、ボランティアは拡大していったという[仁平 2011:292]。仁平が論文内で取り上げている、東京都社会福祉協議会が運営する東京ボランティアセンターが1986年に行なった「ボランティア活動推進のための地域評価に関する調査研究」の中間発表によると、ボランティアを主に3つに分類すると、①町内会の役員など何らかの地位に伴って役割を遂行する、役割義務型、②専門性の高い、とくに社会福祉活動に特化した貢献のしがいがあるとされる、社会的義務型・他者志向型、③ボランティア活動を自己の能力や経験を生かし、伸ばす自己実現の機会として捉える、自己志向型に分けられるとあるが、ここから言えるのはまず、分類法が動機によっていて、新たに③のような他者を必要としない分類が存在することが確認できる。また、1980年代は有償ボランティアや金銭ではなく時間を報酬とする時間預託制のボランティアなど、ボランティアの限界を測るような様々な形態の交換と贈与が増殖した[仁平 2011:339-341]。これによって、いわゆる交換の報酬、返礼が「自己実現」「楽しさ」「金銭的報酬」「時間的報酬」「人格評価」など多岐に渡り、ボランティアの定義が揺らいでいったと考えられる。

(4) ボランティア元年後の変化

阪神淡路大震災という未曾有の大災害によって、人々のボランティアへのまなざしは変わり、災害支援などのボランティア経験数は飛躍的に上がった。その上、1998年のNPO法の成立は市民社会制度を画期的に変化させ、ボランティアという言葉よりNPOの言表が圧倒的に増加した[中島 2009:72]。しかし、仁平は、金子郁容のボランティア論を用いて、こう述べている。

ボランティアをすることで、良かれと思ってしたのにも関わらず、非難され、誤解され、文句を言われることがあり、しかし自分からやると決めたことによって辞めるわけにもいかず、結果的に自身が苦しむこととなる、「自発性パラドックス」に陥る人も増えた[仁平 2011:375,376]。

贈与のパラドックスを解決するため、解決策を内包した自己効用的ボランティア論は、外部からは誤解されやすく、それゆえに精神的報酬どころかその反対のつらさを抱え込む

可能性があるという、危うい活動であるというのだ。ただ、これは逆にいうと、贈与のパラドックスのつらさは「自発性パラドックス」のつらさに回収されているとも捉えられる。

「自発性パラドックス」は新しく始める行為につきまとう不安であり、贈与のパラドックスの解決は「自発性パラドックス」の解決、つまり不安に打ち勝ち、力になってくれる人や方法を見出し、そのプロセス自体から何かを得るという転位が有り得る。結果として、互酬性のあるボランティアは近年、ビジネスから助け合いなど様々な要素を含んでおり、ボランティアである/無いという簡単な判断はできない、ゆえに他の行為に回収されることもあるため、ボランティアという表現を使う必要も無いのではないかという議論さえも生まれてしまったのではないか。

(5)小括

この節では、主に 1900 年から 2000 年のボランティアという言葉の誕生と終焉までの捉え方の変化、政治と様々な意味論との関係をもとに簡潔に述べた。社会情勢や法に翻弄されつつも、慈善、奉仕という体系から形を変え、他者との関係としては役割として、専門家として、そして他者ではなく自身の生きがいや効用のための贈与として変化していった。ただし、自己効用的ボランティア論は自発性パラドックスのプロセスから分かるように、外部からは批判的に捉えられることが多い(この捉え方ができるのは、ボランティア活動を贈与行為とみなすからである)。理論的には、自発性パラドックスは贈与のパラドックスを内包するため、贈与のパラドックスの解決は自発性パラドックスの解決に転位すると解釈できるが、実践の場では、実際に自発性パラドックスは起こっているのか、そして起こっているとするとするのならば、どのように解決し、贈与のパラドックス解決につながるのか。そして、それをまた言説の理論に落とし込んだ際に、自己効用的、ないしは(外部からの否定的な意味を込めた)自己満足的ボランティア論をどのように再評価し得るのであろうか。次章ではこの自発性パラドックスを伴う自己満足的ボランティア論に注目し、筆者の疑問を解決すべく、調査に取り組む。

第3章 ボランティア活動参加者の調査

1. 調査対象の詳細

筆者は2020年11月から12月にかけて、学生団体の一環で、ボランティア活動を行ったことがある、もしくは行っている7名の学生にインタビュー調査を行った。調査対象者は、学生のインターンや就職活動の手助けを行う人材系の団体に所属する学生である。なお、個人情報保護の観点と、本研究において団体を特定させる必要がないことから、調査対象者の所属団体名は明かさず、個人名はアルファベットで表すこととする。

調査対象の団体を選んだ理由、条件としては、①給与という反対贈与は一切ないが、②全国の大学で広く活動しており、活動者数が多く、さらに、③キャリア支援という内容のみでは、参加動機が見えにくいからである。とくに、③についての補足としては、例えば、海外の多様な文化と触れ合いたい、困っている人を助けたいといった、わかりやすくありがちな意味付けのしやすい、国際協力のボランティアや自然災害のボランティアとは異なり、参加動機が予想しづらく、偏りにくいと考えたため、③に至った。また、学生のみで運営しており、無給の割にかなり仕事量が多い上、様々な学部からの学生が集まって運営するため、元々の知り合いの少ないコミュニティで活動しているという状態が、より参加動機が見えづらく、客観的にいわゆる自己満足的なボランティアと捉えられやすく、本研究の調査対象の条件として、適していると判断したからである。

2. インタビュー調査

以下がインタビュー対象者の概要である。

表1 インタビュー対象者の概要

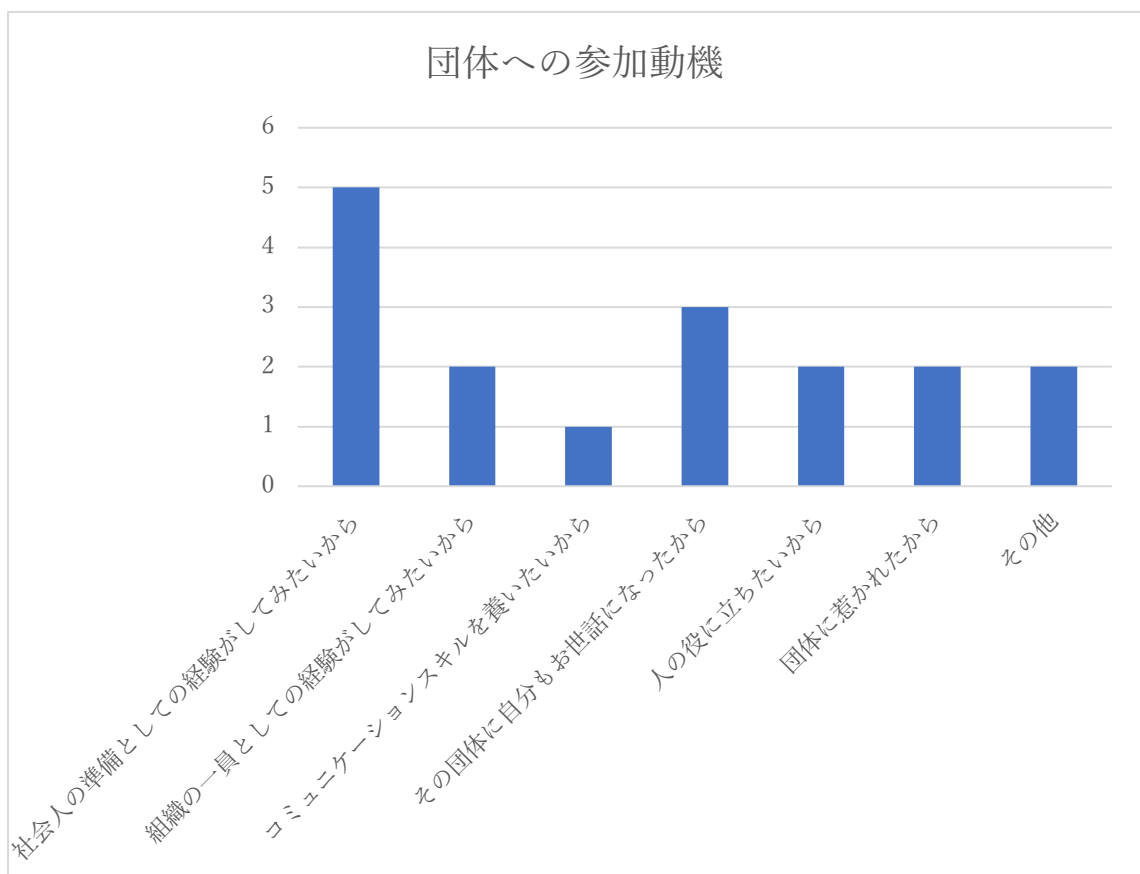
番号	性別	学年	学科	主な活動内容
A	男	4年	国際総合	学生との面談
B	男	修士2年	生命環境	企業との連携事業

C	女	5 年次	国際総合	メディアを使用した広告
D	男	修士 2 年	社会工学	企業との連携事業
E	女	4 年	国際総合	学生との面談
F	女	4 年	国際総合	人事関連
G	女	4 年	国際総合	人事関連

(1) 活動の参加動機

まずは、活動に参加しようとしたきっかけや、団体に入った理由を調査した。インタビューの結果、学生一人につき、複数の動機を持って団体に参加していることがわかった。図 1 はその複数の回答を含めた、インタビュー対象者の参加動機をまとめたものである。

図 1 インタビュー対象者の参加動機



(筆者の調査に基づく)

団体にお世話になった分、自分も力になりたい、もしくは自分でも人の役に立つのであればやりたい、という利他的な目的よりも、社会人の前段階として、もしくは団体行動する上で、一人の人間として、様々なスキルや経験を養いたいという利己的な目的が多かった。とくに多かったのは、社会人になる前に組織の中に身を置き、1つの目標達成を団体の一員として味わう経験がしたいという意見だった。その例として、Aはこう述べている。

A:「一つの目標に向かって頑張る経験がやってみたかった。高校まで部活をやっていて、組織に身を置いて目標に向かって頑張っていたが、大学に入ってから、留学などの個人のやりたいことだけしかしていなかった。大学で様々な経験を積んで、自分も物の見え方が変わったと思うから、卒業するまでに団体の一員として目標を達成する経験がしたかった。それに、社会人になるときっとそのような環境に身をおくと思うから。」

また、AとCは社会人になる前に、数字を追う、つまりビジネスとして仕事をこなす感覚を身につけたいという具体的な取り入れたい経験も述べていた。また、少し限定的にはなるが、Gは、実際に団体の活動内容が、自身の来年度からの仕事と関係する部分があり、社会人0年生としての意気込みを動機として述べていた。

A:「数字を追う経験がしてみたかった。したことのない経験だし、社会に出る前にやってみてみたかった。」

C:「数字を追う活動を、大学生活の今までしたことがなく、社会人0年生として慣れておきたかったから。」

G:「自分の将来の仕事に関係する内容だったから。」

また、Dは、社会人としてというよりも、人としてのコミュニケーションスキルを養いたかったからと述べている。

D:「相談スキルを身につけたかったから。対人関係におけるコミュニケーションスキ

ルを養いたかった。」

E は総括的に、自分にプラスとなるスキルや経験を得ることができると期待し、参加したと述べている。

E:「ボランティアに批判的な友達が、『(その団体では) 人のためにやることで、回り回って自分のスキルや、社会人になってから役に立つ能力を身につけることができる』とその団体の魅力を話していて、興味を持ったから。自分も全くボランティアに興味はなかったけど、そんな友達が言っていたから強く惹かれた。」(カッコ内筆者補足)

これら利己的な参加動機に対して、利他的な目的として多かったのは、自分もその団体にお世話になった、もしくは単に人の役に立てるなら、というものだった。A、B、F はそれぞれこう語っていた。

A:「団体にお世話になった際、話を聞いてもらって頭の整理がついたので、自分も団体の一員として後輩の手助けをしたい。」

B:「(団体の) メンバーに誘われて、自分がもし役に立てるのなら、と思った」(カッコ内筆者補足)

F:「自分の経験や考え方、価値観を後輩に還元し、伝えたかったから。他大の学生と話した時に、周りとのギャップを感じて、もっと自分の考え方を還元する場所が欲しかった。」

もちろん、自分がその団体に今まで関係がなくとも、純粋に団体の目的に興味関心を持ち、参加を決めた者もいた。

B:「団体の目的に興味を持ったから。自分も共感する悩みがあったので、とくにそう思った。」

C：「団体のメンバーである先輩に誘われたから。自分の活動に誇りを持ち、誰かに影響を与えている姿が印象的で単純にかっこいいなと思い、そんな人がいる団体に興味を持てたし、そこに入ることで自分を誇れるのではないかと考えたから。」

その他、このような考えを持つ者もいた。

B：「研究だけでは続かないと思い、別軸で何か頑張ることが欲しかったから」

F：「学類の枠から外れた新たなコミュニティが欲しかったから。」

大学生という、社会人手前というモラトリアムにおいて、組織の一員として動く経験を積んでみたい、そしてその活動が人のためになるのであればなお良いという、主たる利己的な動機に利他的な動機を重ねているものが多かった。もちろん、具体的なスキルとしては、所属する団体によって変わってくるかもしれないが、学生のみで運営するために、ビジネスの基本的なスキルを身につけられるであろうし、必ずしも、何か共通の所属や性格を要した訳ではないメンバーと活動をすることによって、新たな発見や、その中でどう切り抜けてどうメンバーとうまくやっていくか、というコミュニケーション能力も身につけられるであろう。E が述べていた、「人のためにやることで、回り回って自分のスキルや、社会人になってから役に立つ能力を身につけることができる。」というのは、自分のスキル向上や目標達成のために活動することが、人のためにもなるのだと、逆もまた言えるのかもしれない。

(2) 活動を経て良かった点

次に、より活動の実態を把握すべく、活動を経てよかったと自身が思うことについて聞いてみた。圧倒的に一番多かったのは、今まで出会うことのなかった人々との出会いだった。(1) の活動動機でも、新たなコミュニティを増やしたいという意見は出ていたが、学類やサークル、趣味以外の繋がりから、様々な人の存在の認識、そしてその様々な人の魅力、また、様々な人と出会ったことによって新たに培った対人関係スキルについて述べる人がほとんどだった。とくに、時期がコロナ渦ということもあり、新たな人との出会いが

今まで以上に少なくなった分、この団体で得た新たな人々との出会いはとくに貴重に感じたと、Gは述べている。

A:「今まで出会うことのなかった人との出会い。自分より年下でも深く考えている人や、
同年でも身近にいなかったような人、優秀な人に出会えた。」

B:「自分の悪い点を指摘してくれる存在ができたこと。周りにいないし、自分でも避けてきたことだったから。」

C:「これまでの学生生活で出会うことのなかった人と出会えたこと。」

D:「こういう人もいるのだなという幅が広がった。特定のコミュニティしか関わりがなかったで、様々な考えの人と接することができた。コロナの環境もあったので、研究室以外の人と話せる機会があって良かった。そして、そういった人との接し方もわかるようになった。」

E:「優秀な人たちと学生最後に大きなことを成し遂げられたこと。参加者の中には、コロナで授業がオンラインになり、余った時間を何かに費やすために参加した人もいて、この団体に自分が所属していなければ出会わなかった人やコロナ禍でなければ出会わなかった人と出会えたからとても良かった。これは今のモチベーションでもある。」

F:「様々な考えをもっている人に出会えた。」

G:「一緒に仕事をして、責任と義務を伴う関係性が初めてだったから、考えの違いが浮き彫りになる瞬間が多かった。今までのコミュニティだったら考えられないような考えを持つ人がたくさんいて、そんな人をどう受容するか、どう説得するかを考える機会ができたのは良かった。」

出会いという人との関係のみならず、自分の考え方の変化や、スタンスの変化、具体的

なスキルを身につけることができたという者も多くいた。

A：「物事の視座が変化した。入った当初は自分のことで精一杯だったが、やっているうちに組織の中でどうあればいいか考えられるようになった。視座が高くなった。」

C：「忙しさの中でどう自分の生活を過ごしていくかを考えるようになった。タイムマネジメントやストレスコントロールなどをやっていくようになった。」

E：「フラットに人に接するようになった。一人一人の所属の枠など、バイアスをかけずにその人の考えそのものに意見できるようになった。あとは、論理的に話すよう心がけるようになった。」

参加動機で皆が述べていた、「社会人0年生」という言葉だが、それに関して、社会人になった際に使える考え方やスキルを身につけられたと B、F、G は述べている。

E：「数を追うことに興味がないことがわかった。もちろんみんなと協力して数字羽織って行ったけれど、それ以外の自分の中でのモチベーションを見つけてやっていくことができた。」

F：「就職前に、企業に入った時に使えそうなスキルを身につけることができた。基本的なパソコンスキルであったり、人とのコミュニケーションスキルだったり。今までにない自分を見つけることができた。」

G：「成果主義の環境が、自分を合理的な考えにさせた。社会人0年目のような経験ができた。」

今までは自らコミュニティを取捨選択し、居心地の良い関係や、似たような者同士のコミュニティで生活していたのに対し、様々なバックグラウンドを持つメンバーと活動を共にするという経験は、組織の中での自分自身の在り方や視座を変化させるきっかけになったに違いない。ただ、その経験を、やってよかった、自分のためになると思えるのは、自

分の無知を自覚し、もっと色々なことを学びたい、知りたいという探究心があるからとも言える。少なくとも、活動を経て、社会人になる前に、様々なバックグラウンドの人と接し、それらの存在を認知し、それぞれの良さを自分のものにし、さらに対人関係スキルを養えたというのは非常に興味深い。また、E が述べた、自分には向いていないとわかった時に、自分からやると決めた仕事をいかに投げ出さず、他のモチベーションを作ってやっていくかを導き出せた、という利点は、自発性パラドックスの一つの解決法としてあげられるかもしれない。

(3) 活動を経て悪かった点

一方で、活動を経て悪かった点を聞いてみた。先ほど、良い点で最も多かった、新たな人々との出会いについてだが、もちろんその分、メンバーに対してがっかりするようなことも多かったと述べる者もいた。また、士気が高いメンバーが集まったとはいえ、されどボランティア団体であるがゆえ、理想や期待を下回ってしまうような現実には愕然とする者もいた。とくに、この団体は入る時期が早い人と遅い人で4ヶ月ほどずれてしまう場合がある。参加する時期のずれは、目標に対する想いのずれにつながってしまう可能性もある。これに関して、B、D、G はこう述べている。

B：「理想と現実の差を感じる。初期は皆意欲が高く、自主的で組織として風通しも良かった。自分たちの夢を追いやすかった。メンバーも増え、団体に入る時期もずれたので、正解はないけど意見が割れてしまうので、一つの方角にまとまらなくなってしまった。理想としては常に一つの意見にまとまっていたいけど、それが難しいと実感した。」

D：「思っていたより、みんなで決めた目標に対してのストイックさが低い人もいて、ばらばらだった。」

G：「人間関係のもつれがしんどかった。なんでこんなことで振り回されなきゃいけないのだろうと思った。」

ただ、メンバーとうまくやっていくことを第一目標に置いていないため、そのような意

見のずれや人間関係のもつれを全く気にしなかったという者もいた。

F：「入る時期が遅く、最初は多少入りづらかった部分もあったが、自分の目的がスキルを身に付けたい、もしくは自身の考えを広めたいというものだったので、メンバーと仲良くすることが一番の目的ではなかったから、気にならなかった。」

そして、一番多かったのは、自分の怠惰さに気づいてショックを受ける者や、時間を割くことに、自分のキャパシティの限界を感じて辛さに耐えられないと述べる者だった。団体のメンバーに対して、理想と現実の差に愕然するのみならず、自分自身の理想と現実の差に愕然する者が数多くいた。

B：「自分が思ったよりも怠惰でショックだった。自分とのずれを感じた。」

E：「結構時間を割かれていること。割かれているというか、自分で割いているから団体のことが嫌というわけではないけれど、仕事の区切りをつけるのが大変。やりがいもあるし、楽しいけれど、プライベートの時間との区切りが難しい。」

G：「圧倒的に時間を取られること。自分の研究より忙しい。」

そんな、自分自身を追い詰めてしまっているメンバーに対して、自分はそうではないと、複雑な感情を抱く者も多くいた。例えば、Fはこう述べている。

F：「自分は感じないが、辛そうにしている人がいるのが可哀想だなと思う。それに、自分的には、忙しいとは思いますが、自分の時間を自己管理することがむしろ上手くなったので良かった。」

反対に、Cは、強要はできないが、自分から始めたのに弱気でいられるのは困ると述べている。

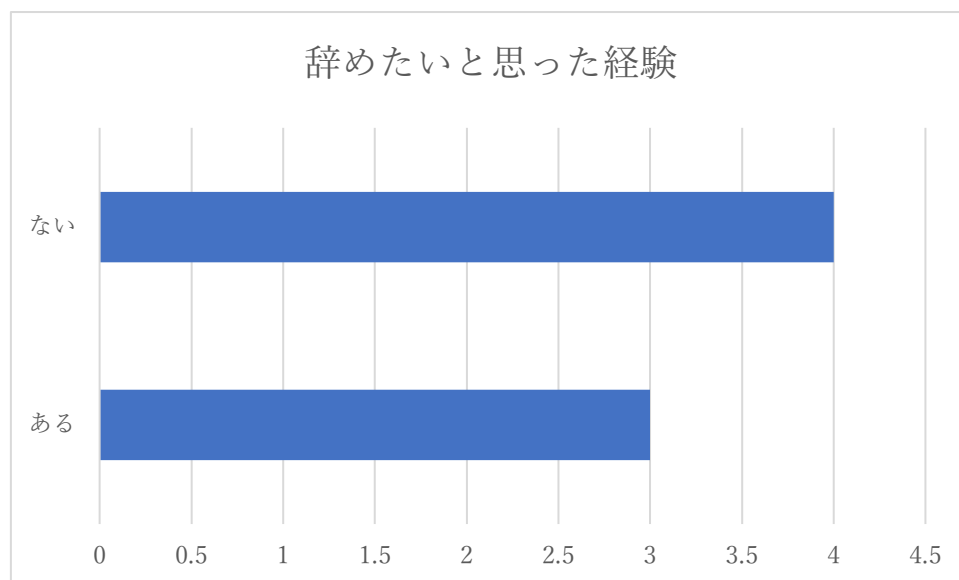
C:「忙しいからできないことを述べている人を見ると、自分から始めているのだから、もっとどうにかできないのかなと思ってしまう。強要はできないけど、忙しいと言われても困ってしまう。」

また、そのような自分自身を追い詰めてしまう人を理解した上で、心がけている忙しさへのアプローチとして、Eはこう意見を述べている。

E:「士気を合わせるために、仕事の量ではなく、その人にとってどのくらい負担かどうかを見極めて仕事をふったり、最初のメンバーだけで固まらないようにしたり、あとは、全てにおいて共有するように心がけた。」

ここで、本稿の疑問点でもある、自発性パラドックスについて、どのような考えを持ち解決できたか、解決できたのであればどのように解決したのか調査するために、辞めたいと思った経験があるか調査した。図2は、団体を辞めたいと思った事があるかどうかをまとめたものである。

図2 団体を辞めたいと思った経験の有無



(筆者の調査に基づく)

インタビューを行ったメンバー7名の中では、わずかにそのような経験はないという者

が多かったが、あると答えた人数とほとんど変わらなかった。そして、印象的だったのは、辞めたいと思った事があるメンバーは皆、何度もあると答えていた事だ。以下の A、C、G は、辞めたいと思った経験がある者の意見である。

A:「卒論がやばいと思った時に、優先順位が高くないのではと考えてしまった。自分が辞めると元々の自分の仕事を誰かに押し付けるのはあまりにも無責任で不信感しかないと思って、実際には辞められなかった。」

C:「やめたらどうなるのだろうと考えるときはあった。ふと逃げ出したくなったり。(することもあった)。」(カッコ内筆者補足)

G:「元々やりたいことを成し遂げたなと思ったら辞めたいと思ってしまった。ただ、もう責任と義務が生じてしまっていたので、逆に自分はその責任と義務でどれだけ仕事ができるのか試してみようと思い、後半は、モチベーションはないけれど、仕事だからやるというスタンスでやっている。それでもやれるなと気づいたし、無給でもやれることで今後社会人になって同じ状況になった時に自分にとって得だと思う。社会人一年目でモチベーション動向に振り回されない自分でいれそう。最初はモチベーションなくてどうしようと思ったけど、同じようにモチベーションで仕事していないメンバーや、すでに社会人で働いている人からの、『モチベーションで仕事をしている人はプロじゃないよ』という考えが今の自分の考えに至った。もちろん、自分でモチベーションを管理することが一番良いけれど、そこに行き着く前に、責任と義務だけでやりきる経験も必要だと思った。」

辞めたいと思ったことのあるメンバーは皆、結局辞めるには至っていない。一度自分の口からやると言ったことによって生じる責任や、すでに背負っている仕事への責任が相まって、辞めるには至らなかったと述べている。また、G は、元々の参加動機を達成してしまって、モチベーションを見出せなくなってしまう、辞めたいと感じてしまったと述べている。そこからのリカバリーとして、モチベーションがなくても責任と義務だけでどれだけ自分がやっていけるか、という新たなステージに踏み出すことで、自信に繋げている。

辞めたいとまでは至らなくても、バランスが崩れそうだったと B、E は述べている。

B：「研究と両立するために入ったが、両立ってなんだ？と立ち止まってしまった。どちらも中途半端なのではと思った。ただ、辞めたいとは思わなかった。」

E：「結局は自分でやりたいと決めたから、誰かのせいにする対象がいなかった。ただ、今この時点でやめたいとは思わなかった。責任は自分にあるから。」

もちろん、Dのようにうまく自分の中でバランスを取っている者もいた。

D：「キャパがいっぱいになることはなかった。バランスをうまくとれた。」

次に、辞めたいという気持ち、もしくは辞めたいとまでは至らなくても、自分の中でバランスが崩れ、辛くなってしまったメンバーはどのようにリカバリーしたのか、つまり自発性パラドックスからどう抜け出したのか聞いてみた。

抜け出した方法について、①自分の悩みを相談すると、②具体的な解決方法を実行するという、主に二つの方法によって抜け出す者がほとんどであった。まず、①の方法に関してだが、同じ団体のメンバーに相談する対象者と、友達や恋人など、仕事内容は分からずとも、自分の身近な存在に相談する対象者がいた。C、Eは前者で、同じ団体の人に相談していた。

C：「そういう時は信頼のおける団体のメンバーに、話していた。仕事の内容をわかっている人の方が話せた。その代わり、誰でも、というよりは、思い詰めていない人を選んでいた。」

E：「同じ団体の人の方が仕事内容もわかっているし、実際の解決にもつながるから相談していた。」

逆に、Aは後者で、友達や恋人に相談していたという。

A：「同じ団体の人には言いづらかった。みんな同じ状況、もしくは自分より多くの団体

の仕事を請け負っている人の前では言えなかった。そこで一人で抱えてしまった。でも、このままではよくないと思い、友達や恋人に相談し、膿を全て出すことで少し気持ちが軽くなった。」

団体のメンバーに話した方が、その後具体的な解決案を出してくれ、悩んでいることをメンバーに把握してもらうことで、配慮してもらうことができるという利点もある。しかし、Aが言うように、皆同じ忙しく仕事に追われている状況下で、かつ、自分からやると言って始めたことに対して、仕事量が多いなどとは言いづらかったという意見もある。Aはこのことについてさらに以下のように述べている。

A：「確かに友達や恋人は、仕事内容に関しては分かってはくれないが、その辛かった時期は、実際問題、時間は作ろうと思えば作れたかもしれないが、心が追いつかなかった。忙しいとしか言っておらず、やらなきゃいけないことだけに追われており、友達と会ったり飲んだりすることもなかったのもので、とにかく言葉に出すことで心も軽くなった。具体的な解決策というよりは、自分のことを親身に考えてくれる人がいるという事実が心の支えになった。」

つまり、実用的な解決策と言うより、自分は相談できる相手がいて、彼らは自分を支えてくれているのだと言う事実が、Aにとって心の安らぎになったという。

ただし、相談さえもできなかったという者もいる。研究とは他に、頑張ることの軸が欲しくて活動に参加したが、両立とは一体何なのかという問題に直面し、戸惑っていたというBは、以下のように述べている。

B：「両立の問題は、当事者がおらず、自分の問題だから相談は誰にもできなかった。」

次に②についてだが、具体的な解決方法は、団体の人と相談して、仕事量を減らす、または、団体内で、自分の状態を報告することによって、周りからの理解を得てペースダウンし、コントロールする者が多かった。

A：「最終的には、団体の信頼している人に相談し、仕事量のバランスを変えてリカバリ

ーできた。」

E:「自分が自ら引き受ける仕事をセーブしたり、逆に、しんどそうな人の仕事を引き受けてたりしてバランスを取っていた。他には、グループチャットに、忙しいから仕事をセーブしますと宣言して解決していた。同じ団体の人の方が仕事内容もわかっているし、実際の解決にもつながるから相談していた。」

他には、自分のマインドやルールを変えたり、愚痴を言い合ったりして解決していた。

C:「(周りには、) 悩まない人もいるのだなと思った。辛くなってもすぐ解決方法がわかって、解決できる人も周りにいた。自分もそうなりたいと思うと、悩まなくなってきた。一旦落ち着いて、やるべきこととそうじゃないことに分けると、コントロールできるようになった。」(カッコ内筆者補足)

G:「自分のやっていることを正当化するために、自分のスキルのためだから合理的だ、と思うより、企業の方向性、価値観を正義だと思うことがこれから必要だと思うから、その練習をしているからこれでいいと考えている。それだけではなくて、自分の中のやりたいこと、正義であることとやっていることにぶれはないから、やっていける。」

E:「忙しすぎると、メンバーと一緒にになって『時給ほしいー!』と愚痴を言って発散していた。」

G:「週末は何もやらない、というような自分のルールを決めて、分単位でスケジュール管理していた。」

(4) その他

一つ目に、彼らなりの理想のボランティア像や、目標とする姿を聞いてみた。まずは、A、Fは能力やスキルが以前より身についている状態、少しでも成長している姿を思い描いていた。

A：「入る前より考え方が身についている状態」

F：「自分のスキルの向上ができていたい。」

誰かに対して影響する存在を理想の姿とする意見もあった。一緒に活動する仲間に対してのみならず、後輩や次の世代、団体そのものに影響を与えるという意見が多く、とくにBは、自身がその団体にいた意味や意義を作りたいと述べている。

A：「一緒に活動している仲間にとってプラスな存在になりたい。自分と一緒にいるから頑張れる、成長できる、楽しめる、なんでもいいけれどポジティブな要因になりたい。」

B：「明確にやりきったという状態でいたい。成果、つまり何か形を残したい。次の世代にも残るようなものを残せるようにしたい。自分がそこにいた意味とは、何か1つでも違いを残していきたい。」

F：「自分の後輩にポジティブなものの考え方や生き方を知ってほしい。また、自分の持っていたスキルや経験を団体に還元したい。」

また、学生のみで運営を行うこともあり、リーダーという役割を担う者が多く、理想のリーダー像について語る者もいた。

A：「リーダーとなる機会があり、個性を出しながらリーダーをこなすにはどうすれば良いか考えるようになった。色々なリーダーを見てきて、いい点を盗んでいきたいなと思っている。これに対する答えが最終的に自分の中で見つければいいな。」

C：「仕事をしないリーダー。みんなに仕事をいかに振れるか。」

他にも、以下のような、こんな自分でいたい、という意見があった。

C：「自信を持って社会人になれるような自分でいたい。」

E：「フラットでロジカルな人物が理想。」

G：「他人から信用を得られるような承認を得ている自分でいたい。」

全体的に、自分自身がこうありたいという想いと、こういう姿で存在することによって、人から承認され、影響できるような人でありたいという想いが交錯しているように思われる。

次に、自分自身の活動とは別に、一般的な「ボランティア活動」というものに対してどう思うのかを聞いてみた。この質問の意図は、今までどのようなボランティア観を持っていたのか、それが今回変わったのか、もしくはこの団体での活動をそもそもボランティアの一環として捉えておらず、変化していないかなどを調査し、実際にボランティア活動に従事する者のボランティア観を調査するためである。もちろん、ボランティアの内容や規模にもよるが、ポジティブな感想を持っていた者もいた。しかし、皆、成果に関して限界はあると述べている。

A：「ボランティアにできることはたかが知れているのかな、と思う。ボランティアはもちろん良いことだけど、壮大なことはできない気がする。大きいことをするのなら時間や人、お金ももっとかかるし、そういうレベルなら搾取になりうると思う。ゴミ拾いとか簡単なことならいいと思う。」

B：「意欲的な人。なんでそこまで意欲的になれるのか知りたい。理由やきっかけ、どんな思いを持っているのか気になる。バックグラウンドがないとそういうことをやらないと思うから。」

C：「留学先でのボランティアは、知らない世界を知ることができたし、外国語の使い分けや自分の興味の深掘りもできて学びが多かった。考え方も変わったので、自分のキャリアにも繋がっていった。」

D:「成果を追い求めすぎなければいいと思う。」

E:「回り回って自分のためになることだと思う。人のためにやることはモチベーションが続かないから、自分軸の何かを持たないとやれないと思う。」

G:「自分の興味や関心からしか入れない。人助けしたい、人のためになりたいからという理由だけでは、やれない。」

成果を追い求め、壮大なことをやることはできないが、新たな発見や、回り回って自分のためになることもあるため、基本的にはポジティブな印象を抱く者が多かった。ただ、繰り返しにはなるが、成果の限界や、人のためでやるというだけでは続かない、つまりモチベーションの限界には全員が触れていた。Aの言うように、「たかが知れている」と言い表すことができるかもしれない。

また、CとFは、今回の調査対象である団体に入る前に、それぞれ別の国際協力ボランティアに個人的に参加しており、その参加した際に感じたことをもとに、ボランティアについて語ってくれた。

C:「一生懸命やってもお金になるわけではないから、モチベーションが続かない。言い訳になってしまうこともある。ただ、お金をもらってないからこそ、そこに責任を伴わないから、自由にできるという利点もある。想いが強いとより頑張れる気がする。今の団体は、想いより能力やスキルを求めている。」

ここでCの述べる想いというのは、Cが興味関心を寄せていた難民問題に対しての想いで、それに関してさらにCは以下のように述べている。

C:「自分の興味関心に愚直に取り組み、かつ留学や研究のテーマに繋がれたのは良かった。ただ、その想いだけでは団体運営を続けることがしんどかった。それぞれ団体

に参加しているメンバー一人一人の想いが違うと、それぞれの想いが大きいほどまとめるのが難しかった。」

つまり、今回調査対象であった人材系のボランティア団体のように、能力やスキルに目標を置いている団体の方が、皆それぞれに成果や理想を追い求めて、個々のモチベーションを自身で作れるうえに、団体としての目標も一つに定めやすいのではないかと C は述べている。

一方で、F は、自費で交通費を出す海外派遣ボランティアに参加し、その際に感じたボランティアに対する想いを語ってくれた。

F:「大学生のよくやっている海外ボランティアは肯定的に思っていない。本気でボランティアやっている人はいないのかなと思った。実際、自分が行ったベトナムでのスラム街の人々の住居改善のためのボランティアでは、結局現地では、目的と関係の無いような活動、例えば草むしりとかしかしていなくて、ボランティアをしたというよりは、旅行の延長で、ボランティアしている自分に酔っているような人が行うような、そんな活動だった。今その経験は、自分の中では行きたいベトナムに行けたからいいやと消化できて入るけれど、とくに海外や開発系のボランティア活動となると、やり方としてはあまりいいものではないし、ボランティアだけでは限界があると思った。」

もちろん、たまたま F が参加したボランティアの状態が良くなかったかも知れないが、ボランティアというのは名ばかり、いわゆる体裁で、実はまた別の参加者を引き込ませる理由や、活動が存在していて、ボランティアにおける実質的な目標や成果は果たしているとは言えない団体も存在するという。そのみならず、参加者側もそこまで士気が高いわけではなく、この例であれば、海外に行けるという目的を達成する手段としてボランティアを選んでいる人もいると F は述べている。

第4章 考察

1. 調査のまとめ

本節では、前章の調査の結果をまとめ、本稿のテーマに沿って考察し、次節の考察につなげるものとする。

(1)理想と現実のギャップ

まず、対象者の参加動機からみた理想と、活動を経て感じる現実のギャップ、そしてそこから対象者が見出すものに着目する。参加動機の調査では、利他的な動機よりも、利己的な動機が多かった。とくに、「社会人0年生」としての経験やスキルを身に付けたいという意見や、新しい「コミュニティ」に自ら飛び込むことによって、対人関係においてのスキルや、自分の居場所を見出したいという意見が多かった。海外ボランティアや災害ボランティアのような、わかりやすい参加理由や意味付けが考えられにくい人材系ボランティア活動において、このような利己的な動機が挙げられるということは、予想外であった。モラトリアム下の大学生である自分自身を客観的に捉え、社会人になる前に、もしくは一人の人間として、何が自分に必要なスキルで何が足りないのかを考察し、実行できている参加者が多いと思われる。もちろん、利己的な目的のみならず、利他的な目的をも併せ持つ参加者が多く、だからこそボランティアであっても参加に踏み切れるのではないかと考えられる。純粋に、自分でも誰かのためになるのであれば、という者もいれば、自分もその団体に相談に乗ってもらうなど、助けてもらった経験があるから、次の世代に自分も貢献したいという者もいた。これは、「人のため」の循環とも言える。

しかし、活動を得て良かった点・悪かった点を調査してわかったことは、団体に入る前に期待していた理想とは違う現実に立ち向かった対象者も少なくはないということだ。もちろん、参加したことによって得られた良い点もたくさん聞いた。一番声が多かった「出会い」についてだが、今までは、学類やサークルや部活など、自身でコミュニティを取捨選択して、どうしても似通ったコミュニティに入ることが多かったが、初めて様々なバックグラウンドを持つ同年代と出会えたという意見が非常に多かった。あくまで学生ボランティア団体といえども、学生自身で目標や具体的な数値目標を設定し、運営していくわけで、そのような責任と義務を伴う関係がより、様々な考えを浮き彫りにさせ、お互いが刺

激し合えるような関係へと発展したのだろう。「今までのコミュニティであれば、考えられないような考えを持つ人がたくさんいて、そんな人をどう受容するか、どう説得するかを考える機会ができたのは良かった。」と対象者の一人も述べている。しかし、良い点がある反面、人間関係のこじれや、士気の違いによる団体内の格差、そして自身のキャパシティと、または、自身の他のタスクとの兼ね合いについて、頭を悩ませる者も少なくなかった。新しい物事を始めるにあたって、全て良い結果になるとはもちろん限らないが、ここで考えなければならないのは、なぜ良い点がありつつも、辞めたいという意見が出るほど追いつめられる者がいるのかということだ。それはおそらく、無給なのに、ボランティアなのに、という理由が頭のどこかにあるがゆえ、悪い点を強調してしまうからではないか。例えばボランティアではなかったら、ここまで悪い点を引きずっていたのだろうか。ボランティアであるがゆえに、理想をかき立てやすいが、その分、理想と現実のギャップに、活動参加者が自ら自発性パラドックスを発生させやすくしてしまうと考えられる。

(2)自発性パラドックスの発生と解決方法

前章で述べた調査の、活動を経て悪かった点という項目の中で、団体を辞めたいと思った経験があるか否かを調査した。これは、先ほど述べたように、いわゆる自らやりたいと始めたことによって、パラドックスに陥り、辞められなくなり、より自信を追い詰めてしまっているのではないかと調査するために行った。実際、活動を経て、自身のプライベートの時間や研究など他のタスクの時間との兼ね合いや、自身のキャパシティが追いつかずに苦しむ者、また、その事実自分が気づくことによって己の怠惰さを知り、ショックを受ける者が見受けられた。やりがいも感じられて、楽しくやっていたが、ボランティアというものに、時間を割かれているという事実と、自分自身で参加を決め、活動を始めたことによって自分で時間を割いているという認識のズレが、対象者を苦しめているように感じられた。一方で、仕事の区切りや時間の割き方がうまく、バランスをとっている者もいた。うまくやっている対象者は、「優先順位」という概念があまりなかった。つまり、自発性パラドックスに陥る者は、ボランティアなのに、とボランティアであることを自分の中の優先順位を落とす理由にする者が多いと感じられた。

次に、その自発性パラドックスの発生、つまり、団体を辞めたいと思った時、どのように解消していたかについて考察する。前章でも述べているが、①自分の悩みを相談すると、②具体的な解決方法を実行するという、主に二つの方法によって抜け出す者がほとんどで

あった。まず、①の方法に関してだが、同じ団体のメンバーに相談する対象者と、友達や恋人など、仕事内容は分からずとも、自分の身近な存在に相談した対象者がいた。まずは、悩みを打ち明ける、誰かに聞いてもらうという行為によって、自身の悩みを誰かに共有して軽くしたと考えられる。後者のように、友達や恋人に聞いてもらう対象者が多かった。対象者が述べているように、単に悩みを共有するだけではなく、自分の悩みを親身に聞いてくれる存在がいるのだという事実が、対象者を支えていると考えられる。また、実際の仕事内容には詳しくないからこそ、客観的な意見をもらえ、対象者自身も、言いたいことをはっきり言い切る事ができるという利点も考えられる。もちろん、前者のように、仕事内容を理解しているからこそ、仕事の辛さをわかってくれるから、同じ団体のメンバーに相談する者もいた。ただ、誰にでも、というわけではなく、まずは、信頼の置ける、かつ、自身は悩んでなさそうなメンバーを選んでいたと言う。

そして、②に関してだが、具体的に何をすれば良いかをメンバーに相談し、実行する者が多かった。何をするかと言っても、仕事量を減らす事が直接的な解決方法ではあるが、それに至るまでのアプローチは、自ら引き受ける仕事をセーブ、または、グループチャットに、忙しいから仕事をセーブしますと宣言をして、周りの理解を得た上で仕事量のバランスを取るなど、様々な方法で解決していた。一方で、仕事量を減らすという直接的な負担の減らし方ではない、大変興味深い方法も見受けられた。例えば、悩まない人もいる、辛くなっても解決方法を即座に見つけ出し、解決できる人もいる、という事実が、自分もそうなるのではないかと、そうなりたいという思いに変わり、悩まなくなった者がいた。他者の考え方が影響して、マインドを変える事が出来たと考えられる。また、自分のやっていることを正当化するために、自分のスキルのためだから活動することは合理的だ、と思うのではなく、将来、社会人として仕事をしていく際には、企業の方向性、価値観を正義だと思うことがこれから必要だと思うから、その練習として今の活動があるとマインドを転換させてリカバリーする者もいた。つまり、悩みを打ち明け、共有し、活動時間を減らして実質的な負担を減らすだけではなく、自身の活動に対する考え方、スタンスの転換によってパラドックスを解決しており、この考え方の転換のような方法は、一時的な悩みの解決ではなく、長期的、さらにはどんなことにも適応できる解決策であると考えられる。自身の調教とも言えるかもしれない。最初に思い描いた動機、理想、期待とリンクしたモチベーションではなく、生じた責任と義務によって自身はどの程度やっていけるのか、むしろやっていかねば今後社会人としてはやっていけない、という今後の自分の理想を見据

え、今の自分を客観視することで導くことのできる、マインドコントロール、考えの転換、ないしは新しいモチベーションの作成とも言えるのではなかろうか。

(3) ボランティアらしさとは

本節では、対象者に聞いたボランティア観や、最終的にこうありたいと思う理想像から見、彼らの思うボランティアらしさのようなものについて考察する。最終的な理想像としては、一貫して「成長した姿」という言葉を耳にした。その成長とは、例えば実用的なコンピューターに関するスキルであったり、対人関係におけるコミュニケーションスキルであったり、元々参加動機にあげていたような理想であったり、予測できなかったような経験であったり、全てにおいて何かしらの成長であると、調査から考えられる。この成長とは、新しい経験を一生懸命取り組んだ結果として当然であるという前提で、誰かに対して影響する存在を理想の姿とする意見が多く寄せられた。影響を与える対象としては人それぞれで、一緒に活動する仲間に対してのみならず、後輩や次の世代、団体そのものに影響を与える存在でありたいという意見もあった。影響を与えることによって、そこに活動に参加した者の存在意義が生まれ、自身が団体に入ってよかったなと思うだけでなく、周囲からも、あの人が団体にいてよかったな、と承認されることで、そのボランティア活動の意義が生まれるように感じられるということだ。自分が所属する前後で何かしらの差異を生むことで、そこに存在していた跡を残そう、残したいと考えているのではないかな。つまり、自身で感じられた成長、つまり自己満足的な成長の承認と併せた、周囲からも認められるような、何かしらの形を残すことによる、客観的な成長の承認を得た状態が彼らにとっての理想像なのではないか。

次に、ボランティア観についてだが、まずもって、ボランティア活動に従事する事がボランティアを肯定的に捉えている事につながるわけではない。ただ、ボランティア活動に従事する彼らが、本当は、一般的なボランティア活動に対してどのような想いを抱いているのかを知る事で、活動を行った際に感じた想いとリンクさせ、客観的に、自己満足的ボランティア活動を再評価する際の転換点の考察において、参考になると考え、この調査項目を実施した。先ほど述べたように、ボランティア活動を外から見た時に、完全なるポジティブな印象を抱く者はいない。追い求めることのできる成果には限りがあるし、単に「人のため」という利他的なモチベーションのみでは続かないという意見が多数で、ボランティア活動の限界について意見を述べる者がほとんどであった。一人の対象者が、ボランテ

ィアは「たかが知れている」と表現していたが、まさに適切な表現かもしれない。もちろん、新たな発見や、「人のため」が回り回って自分のためになることもあるが、それはボランティア活動に限った成果ではない。また、面白いことに、ボランティアに対して、参加したことを元に、客観的に比較して表現する者がいた。今回調査対象であった人材系のボランティア団体のように、能力やスキルに目標を置いている団体の方が、皆それぞれに成果や理想を追い求めて、個々のモチベーションを自身で作れるうえに、団体としての目標も一つに定めやすいのではないかと、いうものであった。活動の内容によって、客観的に捉えた際の自己満足の度合いが変わるというわけではないが、「想い」が強い方が、自発性パラドックスに陥りにくい分、団体としての方向性がまとまりづらく、一度自発性のパラドックスに陥った際に、新たなモチベーションが作りにくいのではないかと考えられる。逆に、今回調査対象であった人材系のボランティア団体のような、「想い」に特化しすぎない団体への参加の方が、能力やスキルに目標を置くことができ、団体としてもまとまりやすく、自発性パラドックスの解決方法も選択肢が広がるのではないかと。どちらにしろ、ボランティアは責任が生じにくい分、自由に活動できると言える。そして、ボランティア活動を通して感じる責任は、自発性から感じるものであるから、その自発性というのは、いかに自分が心から想っていることに即しているかによると言えるのではなかろうか。

また、ボランティアという言葉に隠された自己満足的な意義を疑問視する意見もあった。ある海外ボランティアに参加した経験のある対象者の話から考察すると、海外に行きたいという本当の目的を隠すために、ボランティアという貢献による効用を盾としたボランティア活動も存在し、それは、本来のボランティア活動としての意味を失っており、活動本来の意義が存在しない、という事が言える。つまり、客観的に自己満足的な贈与を受け取るように見えているだけではなく、与え手も、最初から自己効用を受け取る事を見越しており、むしろ自己満足的な贈与を利用しているとも考えられる。

2. 調査から見る自己満足的ボランティア論

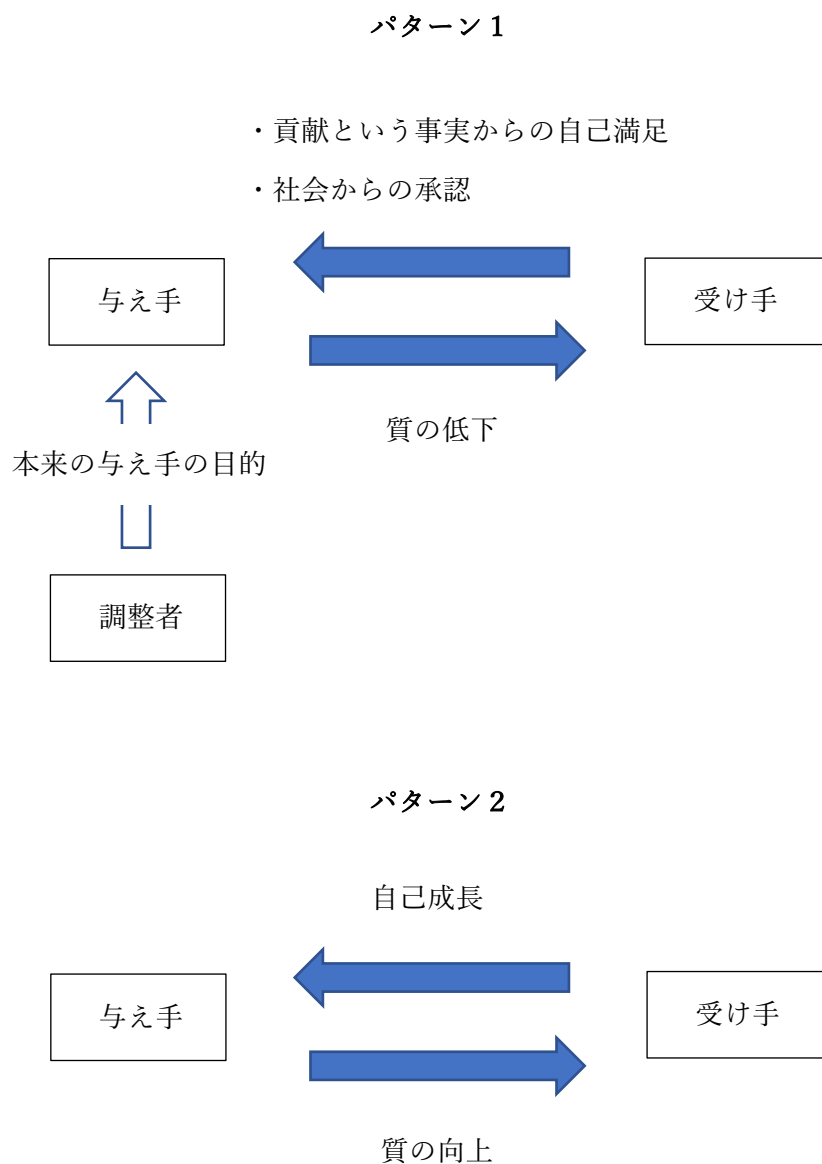
(1) 自己満足的ボランティア論の再評価

本節では、第3章の調査結果から考察を進めた前節をもとに、調査結果を贈与の関係にあるボランティア活動という構図に当てはめて、自己満足的ボランティア論の再評価を行う。

第2章で詳しく述べたが、ボランティア活動は、相手がいて行うものであり、他者のた

めという意味を込めて贈与という行為とみなすことができる。ここでは、ボランティア活動の参加者を贈与の与え手、その活動の相手を受け手と捉える。そして、いわゆる観察者が、このボランティア活動は与え手の自己満足だと否定的に捉えてしまう構図を、今回は二つのパターンに分け、以下のように表した。

図 3 返礼に着目した自己満足的ボランティア論



(筆者の分析に基づく)

上の図は、返礼に着目し、今回の調査をもとに作成した自己満足ボランティア論を表した図である。パターン1、2は共に、客観的に自己満足と捉えられていることを前提とする。パターン1は、2と違って調整者というものが存在するとする。調整者とは、ボランティア活動を企画し、参加者を募集するオーガナイザーのような者とする。そして、与え手はボランティア活動に参加するにあたって、本来の参加動機や目的が、活動本来の目的とは他に存在すると考える。すると、ボランティア活動を行うことによって与え手は、受け手から、ボランティアを行う、つまり人のために貢献したという事実による効用を得る。ここで大事なのは、貢献した事実を自分自身に対して、あるいは社会に対して体裁として見せたいがために、活動を経ての達成感というよりは、事実から得る効用に満足しているということだ。代わりに与えては、調整者から、与え手の本来の目的や楽しさ、例えば海外ボランティアであれば、海外で生活するという楽しさを享受するのである。調整者にとって、本来の目的ではないものを、与え手が本来の目的として享受するために、最初から自己効用を受け取る事を見越しており、むしろ自己満足的な贈与を利用しているとも考えられる。結果的に、与え手から受け手に渡る活動内容による恩恵は、かなり質が低下したものになると容易に予想される。反対に、パターン2は、与え手の参加動機や目的が、活動内容に付随したものであるとする。与え手は、自身の目的を達成するために、活動内容に真剣に取り組み、結果、受け手は質の高いものを受け取り、与え手は受け手からの返礼という形で、自身の成長に繋がる何かしらの変化を受け取ることができる。自己成長の内容は、もちろん、与え手がボランティア活動を行う過程で獲得したいと思っていたスキルや能力、それだけではなく、予想もしていなかったような人々との出会いやコミュニティの広がり、考え方など、多岐に渡ると調査の結果からも考えられる。このように、客観的には同じ自己満足と捉えられるようなボランティア活動であっても、与え手の参加動機や目的の存在場所によって、パターン2のような再評価できる捉え方も可能ではないだろうか。

(2)参加動機と自発性パラドックスの関係

次に、参加動機と自発性パラドックスの関係を考察する。自己満足的ボランティアを再評価する際に、自発性パラドックスの解消を検討しなければならない。よって、調査を進めていく上で見えてきた、参加動機と自発性パラドックスの関係、そしてリカバリーまでの特徴を下の表にまとめた。

表 2 参加動機と自発性パラドックスの関係

動機	自発性パラドックスに陥る可能性	陥った場合のリカバリー
「想い」	低	難
「能力」「スキル」	高	易

(筆者の分析に基づく)

調査を行なう中で、今回の調査の対象者全員が「能力」や「スキル」という言葉を使っていた。とくに、参加動機についてのインタビューでは、この二つの言葉を使って説明する者が多かった。逆に、対象者の数名は、以前参加していたボランティア団体の参加動機は、自分自身の興味関心に基づいており、「想い」によるものが大きかったと述べていた。それらのインタビュー内容から、表2の関係性が浮かび上がってきた。説明すると、活動への参加動機が、「想い」に関するもの、例えば自分の専攻に関するもので、強い想いがあればあるほど、自発性パラドックスに陥る可能性が低いと考えられるのだ。反対に、活動への参加動機が、活動内容自体にそこまで思い入れがなく、自身の「能力」や「スキル」の成長に注力したものであると、自発性パラドックスに陥る可能性が高いのではないかと考えられる。自発性パラドックスというのは、第2章でも述べたように、外部からはあまり肯定的には捉われない自己満足のボランティアにおいて、自分からやると決めたことによって辞めるわけにもいかず、結果的に自身が苦しむこととなる、というものである。言うまでもなく、自分からやると決めたという点に自発性が発生するわけだが、自分の好きなことや、今まで興味関心を寄せてきた強い想い、思い入れがあればあるほど、活動をやろうと決めるまでのハードルが低くなる。その上、「想い」に基づいた自発であれば、活動を進めていくうちに発生する問題点に対して、なぜ自分はこの活動をやっているのだろう、とは思わないはずである。ただ、活動内容に関係のない問題、例えば、人間関係のこじれであったり、団体を運営していく上での事務作業であったり、そのようなことに対して疑問を抱いてしまうと、自分のやりたいことはこうではないのに、と感じ、自発性パラドックスに陥りやすくなる。そして、やりたいことがはっきりしていた分、そこからリカバリーするのは難しいと考えられる。一方で、「能力」や「スキル」の成長に注力した動機である場合、やろうと決めるのにハードルが高い。余裕がないと、活動を経ていくうちに、自分の思っていた内容とは違った、または、自分のキャパシティや他のタスクとの兼ね合い

で、なぜ自分はこの活動をやっているのだろうという疑問に立ち向かう可能性が高いと考えられる。ただし、なぜ前者に比べてリカバリーが簡単であると考えるかという点、もともと活動内容に注目して団体への活動参加を決めていない分、モチベーションを他の部分に移してリカバリーしやすいと調査からわかったからである。

そして、必ずしも、参加動機と自発性パラドックスの関係が表の通りであるとは限らないが、このようになる傾向が考えられる。よって、参加動機から自発性パラドックスの特徴を読み取ることも、自発性パラドックスの解消方法の検討に繋がるのではないだろうか。

第5章 結論

本稿では、たとえ自己満足という言葉がつきまとい、客観的には否定的に捉えられがちなボランティアであっても、参加者らが何かを得て返ってくるものがあるとするれば、自己満足的なボランティアというものを肯定的に捉えることができるのではないだろうか、という筆者の疑問に基づき、実際にあるボランティア団体を取り上げ、彼らが抱く理想のボランティア像を言語化し、贈与のパラドックスや自発性パラドックスを解消するような、与え手側からの自己満足的ボランティア論の再評価について考察することを目的としていた。

第2章では、主に1900年から2000年のボランティアという言葉の誕生と終焉までの捉え方の変化、政治と様々な意味論との関係を簡潔に述べた。社会情勢や法に翻弄されつつも、慈善、奉仕という体系から形を変え、他者との関係としては役割として、専門家として、そして他者ではなく自身の生きがいや効用のための贈与として変化していったということが明らかになった。また、ボランティア活動をめぐる語りや、贈与のパラドックスに関する先行研究から、本稿で取り上げる自己効用的ボランティア論や自発性パラドックスという概念の誕生や問題点を明らかにし、自己効用的ないしは自己満足的ボランティア論の再評価に向けて、自発性パラドックスの発生理由、解消方法の検討、そしてそれによって自発性パラドックスを内包する贈与のパラドックスの解消方法が明らかになることを述べた。

第3章では、最終的な言語分析に落とし込む、実際のボランティア団体の状況を調査した。ある人材系ボランティア団体に所属する学生に、活動の参加動機や目的、活動を経て良かった点や悪かった点、辞めたいと思った経験からどう脱却したか、そして彼らの理想のボランティア像やボランティア観についてインタビューを行った。まず、参加動機については、皆複数の動機を持っており、利他的な目的よりも、利己的な目的が多かった。一番多かった答えとしては、「社会人0年生」として数字を追う、つまりビジネスとして仕事をこなす感覚を身につけたいという意見や、新たなコミュニティに飛び込む社会人になる前に、人としてのコミュニケーションスキルを養いたいという意見があった。一方で、自分もその団体にお世話になり、後輩や次の世代に手助けをしたという意見もあった。このような「人のため」が代を超えて循環していくというのは、ボランティア団体だからこそ

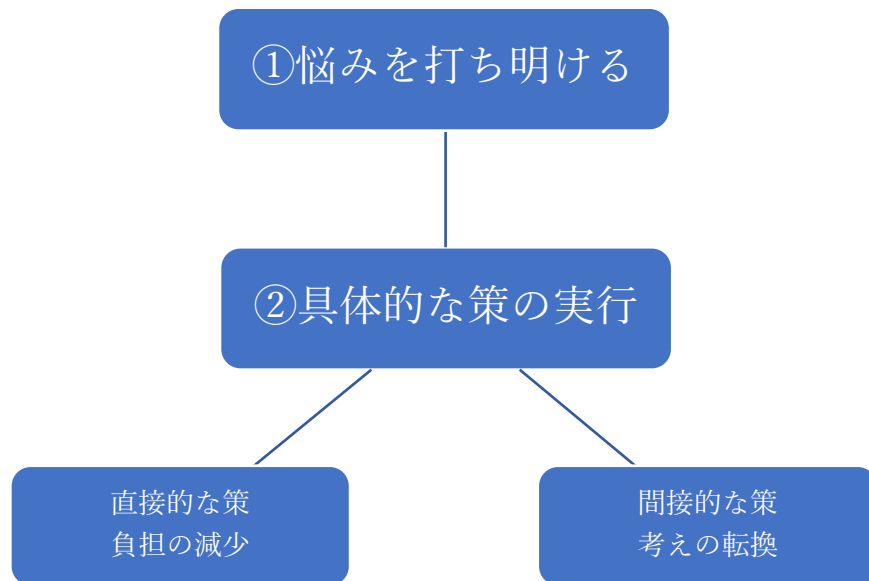
あり得る、非常に面白い現象である。また、自分の視座や物事の考え方を共有したいという利他的な意見もあり、大学生という、社会人手前というモラトリアムにおいて、組織の一員として動く経験を積んでみたい、そしてその活動が人のためになるのであればなお良いという、主たる利己的な動機に利他的な動機を重ねていることが印象的であった。考察で述べたように、海外ボランティアや災害ボランティアとは違った、意味づけのしにくい人材系ボランティアにおいてこのような利己的な動機が多く出されているということは、社会人になる前に、一人の人間として、何が自分に必要なスキルで何が足りないのかを客観的に自分を捉え、考察し、実行できている参加者が多意ことを示す。おそらく結果的に起こったではあるが、利他的な理由のみよりも、利己的な理由に利他的な理由を併せ持った方が自発性パラドックスに陥りにくいかもしれない。「人のためにやることで、回り回って自分のスキルや、社会人になってから役に立つ能力を身につけることができる。」とインタビュー対象者が述べていたが、逆にこの調査結果に従うと、「自分のスキル向上や目標達成のために活動することが、人のためにもなる」という方が、適しているかもしれない。これこそ、利己的な理由のみではない点も、ボランティアだからこそ利他的な動機が挙げられるという、良さを持ち合わせていることを表す。

そして、活動を経てよかった点・悪かった点についての調査から、活動した結果のリアルを追求した。そこには活動参加前の理想と現実のギャップが存在し、そのギャップに頭を悩ませ、結果的に自発性パラドックスを発生させてしまう者がいることが明らかになった。まず、良い点として、圧倒的に「出会い」という意見が多く、今まで出会うことのなかった人々とのつながりやコミュニティの広がり、そういった人々とどう接したら良いか学べたなど、新たなつながりや発見が見受けられた。学類やサークルなど、似通った趣味や共通のものを通じて集まる集団とは異なった、ボランティア団体だからこそ感じられる良さであろう。これは、参加動機として、新たなコミュニティの探求を語っているものもいたが、もともとと思っていたより多くのことを学べたという感想が多く寄せられた点であった。しかしその一方で、その出会いの中でも、士気の高さや意見の違いによって、団体のメンバーに対する理想と現実の差に愕然とした者もいる。士気の高さについては、それぞれの参加動機やモチベーションが違うだけではなく、この団体の特徴としてあげられる、参加時期が最大4ヶ月ほど違うという点も少なからず影響していると思われる。そして、それ以上に顕著だったのが、自分自身に対する理想と現実の差に愕然とするものが多いことであった。自分の怠惰さに気づいてショックを受け、活動に多くの時間を割くことが辛

く感じる、または、自分のキャパシティの限界を感じてしまい、辛さに耐えられないと語っていた。このようなギャップによって、団体を辞めたいと感じるものがインタビュー対象者の約半分いた。さらに、自発性のパラドックスを引き起こして、やめられない現実にも阻まれ、より困惑に陥る者が多くいた。まずここで、ボランティアの問題点として挙げておきたいのは、「(たかが) ボランティアなのに、無給なのに」という自身の心の奥底にある声によって、活動に大した感じてしまった悪い点を、より強調させてしまい、悩みを助長してしまう恐れがあるということだ。逆に、理想と現実のギャップを感じたとしても、辞めたいとまでは感じない人は、その活動をボランティアであるという枠から離れることができることが多いとも言える。つまり何が言いたいかというと、ボランティアというものは、無給であるからこそ、そして、参加する際に自発性を伴うからこそ、活動の成果には限界があるとも言えるが、そこまで責任のない分自由に行動できる、はずである、ただ、その自由というのは自分の意思で決める自由であるがゆえ、参加動機やモチベーションに何か揺らぎが入ってしまうと、自発性パラドックスにつながってしまうと考えられる。

これが自発性パラドックスの発生理由として、話を戻す。次に、どのように解消するか、という点だが、活動をやめたいと感じた経験からどのようにリカバリーしたのかを聞いた調査から筆者の分析によって導く。以下に、その第3章の調査から検討した具体的な解消方法の道筋を示す。(前章の参加動機と自発性パラドックスとの関係性は、調査を行なっていく上での筆者の気づきであり、自発性パラドックスの解消方法を検討する際の一助となるが、あくまでも考察であり、必ずしも全てに当てはまるわけではない。その上、具体的な解決方法を述べているものではない。)

図 4 自発性パラドックスの解消方法



(筆者の分析に基づく)

まず、①悩みを打ち明ける、についてだが、この行為によって、自分の身近には親身になってくれる存在がいる、そして自分を支えてくれる人がいるという事実を認識できる。そして、自発性パラドックスによる自己否定スパイラルから脱却し、自信喪失に歯止めを掛けることが可能になる。調査によると、とくに親しい友達や恋人など、仕事内容を理解してくれることよりも、親身になって話を聞いてくれるような相手に相談する者が多く、同じ状況にあるかもしれない同じ団体のメンバーに相談になってもらうことは少なかった。ただ、少数派ではあるが、①と②の二つの段階を一度に行う、つまり、具体的な解決策を最初から求めるために、悩みを打ち明けるというよりは、解決策を同じ団体のメンバーとの相談から導く者もいた。ただ、同じ団体のメンバーの中であれば誰でも、というわけではなく、相談者が信頼していて、かつ、相手自身は悩んでいなさそうな人を選んで解決した者もいた。次に、②の具体的な策の実行として、直接的な策、例えば仕事量を減らして、ボランティア活動にかかる負担の減少を試みるという方法と、間接的な策、つまり、実際の仕事量や状態は変わらなくとも、自身の考え方を变えることによって、より長期的な問題の解決方法をとっていることが、調査からわかった。ここでとくに着目したいのは、間接的な策である、考えの転換によってパラドックスを解決するという方法である。あるイ

インタビュー対象者は、元々の参加動機を達成してしまっ、モチベーションを見出せなくなってしまう、辞めたいと感じてしまったが、そこからのリカバリーとして、モチベーションがなくても責任と義務だけでどれだけ自分がやっていけるか、という新たなステージに変えて、そのステージで活動しているような気持ちで続けている、と意見を述べていた。新たなステージに踏み出す、つまりは責任と義務のみでやりきるという新たなモチベーションに転換することで、自信に繋がっていると考えられる。また、同じような考え方ではあるが、自分のやっていることを正当化するために、自分のスキルのために活動をするのだから合理的であり、自分の行なっていることは間違っていない、と思うよりは、企業の方角性、価値観を正義だと思うことが、これから社会人になって必要である考え方であるがゆえに、その考え方の練習を行なっているというようなマインドの転換が、インタビューで明らかになった。もちろん、参加者の中のやりたいこと、正義であることと、実際にやっていることにぶれはないため、考えの転換によって、パラドックスの解消につながるのだろう。しかし、この自発性パラドックスの解消方法としての、「考えの転換」という考えは、一時的な、辞めたいけど辞められない悩みの解決ではなく、長期的な解決、さらには人生におけるどんな決断にも適応できる解決策であると考えられる。そして、この結果をさらに大きく捉えた場合、ボランティア活動を行なっている今現在の自分だけに気をとられ、悩んでいる今の解決だけに注力するのではなく、今の自分のボランティア活動への従事は、自身の長い人生の中での一部であり、今の悩みや辛さが全てではない、という、自分を客観視するという考え方そのものが、一番大切な自発性パラドックスの解決方法と言えるのではないだろうか。

そして次に、これらの解消方法があることを踏まえた上で、第3章の調査結果を、贈与の関係にあるボランティア活動という構図に当てはめて、自己満足的ボランティア論の再評価を行った。前章の図3が表すように、最終的に受け手から与え手に返ってくるもの、つまり返礼に着目すると、与え手の参加動機や目的が、本来の活動内容に付随したものであるパターンは、肯定的に再評価できるのではないかという結論に至った。与え手は、自身の目的を達成するために、活動を真剣に取り組む事で、与え手は受け手からの返礼という形で、インタビュー対象者のほとんどが口にして、「自己成長」に繋がる何かしらの変化を受け取ることができると考えられる。「自己成長」の内容としては、与え手が、ボランティア活動を行う過程で獲得したいと思っていたスキルや能力はもちろんだが、それだけではなく、予想もしていなかったような人々との出会いやコミュニティの広がり、考え方

など、多岐に渡る。自身が予想していたものよりも学びがあり、受け手に対して与えた以上の多くのことを与えられたということだ。そして、この再評価は、第3章のインタビュー調査の最後の質問である、ボランティア観や理想像と結びつけることができる。彼らがどのような姿を理想であり、ゴールとして目指しているのかということから、返礼としての「成長」をどう認識するのかが見えてきたのだ。彼らがボランティアらしさとして考えていた姿というのは、自身で感じられる成長を経た姿のみならず、一緒に活動する仲間に対してプラスな存在、つまり、自分と一緒にいるから頑張れる、成長できる、楽しめる、そんなポジティブな要因である姿や、成果として何か形を残し、後輩や次の世代にも残るようなものを残せるような姿、そして自分がそこにいた意味を示す、何か1つでも違いを残して団体そのものに影響を与えられる姿であった。つまり、(客観的に捉えるとするならば、いわゆる) 自己満足的な成長の承認と併せて、周囲からも認められるような、何かしらの形を残すことによる、客観的にも成長であると承認を得られるような状態、姿が、彼らにとっての理想像であり、ゴールであるのだ。これが、外部からは自己満足的だと批判的に捉えられるが、実態の調査から理論に落とし込んだ自己満足的ボランティア論を再評価できた、からくりなのである。

最後に、本稿の課題を整理する。今回、インタビューを行った対象団体は1団体のみであり、たまたま対象者が共通の悩みや考えを持っており、結果が出ている、つまり偏っていることも考えられる。そのため、本稿でまとめた参加動機と自発性パラドックスの関係性、考えの転換による自発性パラドックスの解消方法、そして返礼に着目し、再評価を行った自己満足的ボランティア論の考えが、必ずしも普遍的なものとは限らない。また、調査数も7名と、十分とは言えず、絶対的に皆が自発性パラドックスをこのような方法で解決しているとは言えない上に、インタビュー対象者は全員、自発性パラドックスに対するリカバリーがうまくできているが、実際には団体内に活動自体を辞めてしまった学生もいる可能性を否定できない。また、調査対象者の学生の主な活動内容による違いや、各々のその団体における役割、例えば支部長である、もしくは何らかのセクションのリーダーであるという、役職の違いにも注意を払わなければならなかった。やはり、リーダーを務めている学生の方が、その団体の活動への想いが強く、一概に、人材系の団体であるから、思い入れがあまりないとは言えないからである。その上、団体の特徴として記していた、参加時期の違いと団体や活動内容への想いについて、もっと深く追求し、公平性を保つべきであった。以上を踏まえて、質的研究の改善を今後の目標とする。

注

(1) 兵庫県ホームページ

<http://web.pref.hyogo.lg.jp/kk41/documents/000036198.pdf> (2021/01/18 参照) より。

(2) 文部科学省ホームページ

http://www.mext.go.jp/a_menu/saigaijohou/syousai/1304540.htm (2021/01/18 参照) より。

(3) 日本財団学生ボランティアセンターホームページ

<http://gakuvo.jp/about/newsrelease/> (2021/01/18 参照) より。

(4) 全国社会福祉協議会ホームページより。

(5) 文部科学省ホームページ

http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/houshi/detail/1369241.htm (2021/01/18 参照) より。

(6) 厚生労働省 ボランティアについて

https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf (2021/01/18 参照) より。

(7) 東京ボランティアセンターホームページ

<https://www.tvac.or.jp/shiru/hajime/manaa.html> (2021/01/18 参照) より。

参考文献

荒井俊行

2017 「青年期のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因」 『早稲田大学人間科学研究科学位論文』。

伊藤忠弘

2011 「ボランティア活動の動機の検討」 『学習院大学文学部研究年報』。

内海成治

2019 『ボランティア・難民・NGO 共生社会を目指して』 ナカニシヤ出版。

柴田謙治

2010 「ボランティアとは何か」 柴田謙治・原田正樹・名賀亨編 『ボランティア論』 pp.2、みらい出版。

田中雅文

2011 「ボランティア活動とおとなの学び 自己と社会の循環的發展」 『教育学研究』 79(1): 114。

中島裕明

2009 『ボランティア論—共生の理念と実践』 田村正勝編 pp.55,68-70,72、ミネルヴァ書房。

仁平典宏

2011 『「ボランティア」の誕生と終焉〈贈与のパラドックス〉の知識社会学』 名古屋大学出版会。

Summary

Reevaluation of Self-satisfaction Volunteer theory

The aim of this thesis is to reevaluate of Self-satisfaction Volunteer theory which is captured negatively. A lot of people have participated in volunteer and some laws to promote volunteer have arranged since the Han-Shin Awaji earthquake disaster in 1995. However, the number of volunteers has not increased steadily. Nishina, who is famous for the study of volunteer theory, said that this phenomenon could be explained by the analysis which is not only influenced by politics but also public opinion. Therefore, this thesis shows how volunteer activity has captured and explained with age to clarify the volunteer activity objectively without its value. Then, I investigate actual volunteer students and put that result in volunteer theory positively even it could be captured objectively.

It is generally said that volunteer has 3 necessary meaning, which is initiative, sociality, and complimentary. However, there is no consistent definition and type. There are three ranges which is the word definition, the statement which expresses how people understand volunteer activity between the word and reality, and the reality of volunteer activity. This thesis will focus on the statement objectively. Volunteer activity could be understood as the gift action between giver and recipient. There is “gift paradox” which is the expression when giver gets minus result unexpectedly. In this way, if volunteer activity is captured as the gift action, it is possible for observer to mention it critically regardless of giver intention.

The chapter 2 shows how the statement of volunteer activity has changed mainly since 1900 to 2000 with politics and various semantics. The statement has been sometimes influenced by social situation and laws as tool, but it changed for others, for some specific people in need, and for giver’s self own. Especially, this thesis focus on Self-efficacy or Self-satisfaction volunteer theory. That theory is one of the semantics which was born recently. The theory is captured negatively because if giver take action for recipient, the observer understand that is for giver’s self-satisfaction. Also, there is another problem for giver which is the occurrence of “Self-motivation paradox”. That paradox is literally happened when giver is in trouble because of Self-motivation. It is possible to be causes that some

critics around giver or blame to giver's self. Therefore, it is necessary to clarify the reason why self-motivation paradox happens and how that paradox could be solved to reevaluate self-satisfaction volunteer theory. Self-motivation paradox is included in gift paradox, so to solve self-motivation paradox might lead to solution of gift paradox.

The chapter 3 shows the result of investigation through interviews to students who have been volunteer about human resources. To clarify what they think about ideal image for volunteer and how they solve self-motivation paradox, I ask them some question in 5 steps. At first, many students said the reason of participation that they wanted to get some skill and experience as job worker or mature human. That is for themselves, and the reason for others is less than that for themselves. Through the activity, they have noticed some gap between ideal and reality. They have some good points to meet new mates and have new discovery, but there are also bad points to feel limit of their capacity and be involved complicated relationship. However, some people who want to retire the group could not do that because they feel obligation and responsibility. Of course, they consult with their friends, lover, and teammates and they recover their mental conditions now, but it is definitely that they had been in trouble under self-motivation paradox.

As a conclusion of this survey, I summarize the relationship between the reason for participation and self-motivation paradox. That relationship can be on of the trigger to solve self-motivation paradox. Furthermore, I made 2 patterns of self-satisfaction volunteer theory. When giver participate for other reason except for the reason of real volunteer activity, giver could abuse volunteer activity to get recognition from society. In contrast, when giver focus on the content of volunteer activity, they can get self-growth through activity. If we think of that two patterns, the latter could be value for reevaluate even two patterns look like self-satisfaction volunteer objectively. Moreover, it could be said that there are two steps to solve self-motivation paradox. The first step is consultation with their familiar people to recognize they are not their own, and the second step is execution for issues, for example, reduction of task or conversion of how motivation can be controlled. Especially, idea conversion is important to keep motivation. Change the motivation and capture yourselves objectively leads to control self-motivation paradox.

However, the worst point during volunteer activity is they tend to focus on bad result because it is even volunteer or unpaid. It is said that volunteer has limit, but it is also said that there is no responsibility which means free and giver could follow their intention. Because giver could follow

their intention, that is unavoidable that self-motivation happen, so it is depends on the desire and feeling of giver in the reason for participation and motivation.

In the end, that my consideration is not complete and there might be unapplicable example. However, the self-satisfaction volunteer can be captured positively when giver decide to participate for their self-growth during activity, and self-motivation paradox could be solved effectively by conversion of motivation and viewpoint of yourselves.

謝辞

本稿の執筆にあたり、本当に多くの方にお力添えを頂いた。この場を借り、感謝の意を示したい。

まずは、本稿の執筆に際してご指導頂いた関根久雄教授に御礼を申し上げたい。関根教授には、3年次からゼミ生としてお世話になり、本稿の執筆にあたっては、執筆のアドバイスや添削、参考文献の紹介はもちろん、テーマの新たな方向性を見出してくださり、常に支えてくださった。今年は、コロナ禍でゼミの形式も変わり、慣れないことも多かったが、メールでの相談も含め、様々な形でサポートしてくださった。

また、ゼミ生にも感謝を申し上げたい。同じゼミの仲間として毎週のゼミでは議論を交わし、皆の異なる意見を聞くことで、自身の視野を広げることができた。また、論文発表においても、客観的な意見や、同じゼミ生からの率直な意見がいつも胸に響き、論文をより良いものに仕上げることができた。

続いて、本稿の内容に関するインタビュー調査は、団体の支部長の方の協力を得て、2020年11月から12月にかけておこなった。本稿の執筆に不可欠であったインタビュー調査にあたり、インタビューを引き受けて頂いた7名の学生の皆様、私と同じように卒業論文や研究などでお忙しい中、時間を割いて快く質問に答えてくださったことに心より御礼申し上げます。私自身が経験したことのないお話ばかりで、聞いていて様々な発見があり、インタビューをさせて頂いていた私も、とても楽しませて頂いた。そして、インタビューを引き受けて頂いた方をご紹介してくださった学生の皆様にも感謝を申し上げます。

最後に、私の学生生活を常に支えてくれた家族に感謝申し上げます。大学で何不自由なく自分の興味関心のある学問に励むことができたことは、家族の支えなしでは成し得なかった。また、海外での留学をサポートし応援してくれたことも、非常に感謝している。

改めて、本稿の執筆にお力添え頂いた皆様に感謝の意と敬意を示し、本稿の結びとする。